

主要産地における平成26年産水稻の収穫量及び作柄概況等について 第6報 (12月22日現在)

作成：公益社団法人米穀安定供給確保支援機構情報部(平成26年12月24日)

全 国 道 府 県	収穫量				作 況			品質概況等		参 考					
	収穫量 (主食用)①	前年産主食用 収穫量	前年産収穫量 との比較		参考(ふるい目幅1.85mm)		作況指数 26年産	作況指数 25年産	前年産 との 比較 対差	26年産水稻 うるち玄米 1等米比率 (26年11月末)	25年産水稻 うるち玄米 1等米比率 (25年11月末)	生産数量目標			平成27年産 自主的取組 参考値
			対 差	対 比	予想収穫量 (主食用) (概数)	①との対差						平成27年産	前年産 との比較	増減率	
t	t	t	%	t	t				%	%	t	t	%	t	
全 国	7,882,000	8,182,000	▲ 300,000	96.3	7,561,600	▲ 320,400	101	102	▲ 1	81.7	79.6	7,510,000	▲ 140,000	▲ 1.8	7,390,000
北 海 道	597,200	601,300	▲ 4,100	99.3	577,500	▲ 19,700	107	105	2	83.8	89.8	547,330	▲ 6,810	▲ 1.2	538,580
青 森	257,400	272,100	▲ 14,700	94.6	248,600	▲ 8,800	104	104	0	87.5	91.2	242,460	▲ 4,540	▲ 1.8	238,580
岩 手	287,700	287,800	▲ 100	100.0	278,000	▲ 9,700	105	102	3	92.5	95.6	271,210	▲ 4,330	▲ 1.6	266,880
宮 城	379,600	388,600	▲ 9,000	97.7	368,000	▲ 11,600	105	104	1	92.6	93.7	348,620	▲ 14,010	▲ 3.9	343,050
秋 田	453,000	450,200	2,800	100.6	437,800	▲ 15,200	104	100	4	91.2	91.8	417,540	▲ 15,500	▲ 3.6	410,860
山 形	380,700	386,100	▲ 5,400	98.6	370,300	▲ 10,400	105	102	3	92.8	95.0	344,500	▲ 14,070	▲ 3.9	338,990
福 島	350,600	368,600	▲ 18,000	95.1	339,300	▲ 11,300	104	104	0	92.3	92.1	339,550	▲ 8,870	▲ 2.5	334,130
茨 城	396,200	398,900	▲ 2,700	99.3	384,600	▲ 11,600	105	104	1	93.0	90.3	337,370	▲ 4,180	▲ 1.2	331,980
栃 木	313,700	334,900	▲ 21,200	93.7	300,200	▲ 13,500	100	102	▲ 2	96.4	88.3	298,690	▲ 10,640	▲ 3.4	293,920
埼 玉	169,800	165,900	3,900	102.4	160,300	▲ 9,500	102	98	4	77.3	65.1	151,270	▲ 1,410	▲ 0.9	148,850
千 葉	325,300	329,100	▲ 3,800	98.8	314,200	▲ 11,100	104	104	0	94.6	93.2	246,490	▲ 2,790	▲ 1.1	242,550
新 潟	576,000	594,400	▲ 18,400	96.9	557,000	▲ 19,000	101	103	▲ 2	74.9	76.3	521,290	▲ 14,350	▲ 2.7	512,960
富 山	193,100	198,200	▲ 5,100	97.4	187,800	▲ 5,300	101	102	▲ 1	86.7	68.7	185,650	▲ 6,690	▲ 3.5	182,680
石 川	123,400	130,500	▲ 7,100	94.6	119,800	▲ 3,600	98	101	▲ 3	72.5	81.9	123,630	▲ 2,770	▲ 2.2	121,650
福 井	126,000	134,700	▲ 8,700	93.5	120,800	▲ 5,200	98	102	▲ 4	85.4	81.8	125,460	▲ 2,670	▲ 2.1	123,460
長 野	195,800	213,000	▲ 17,200	91.9	187,000	▲ 8,800	96	101	▲ 5	95.4	96.0	194,000	▲ 2,640	▲ 1.3	190,900
滋 賀	157,100	169,300	▲ 12,200	92.8	149,000	▲ 8,100	97	102	▲ 5	53.2	61.5	160,450	▲ 2,930	▲ 1.8	157,880
兵 庫	177,800	189,800	▲ 12,000	93.7	167,900	▲ 9,900	97	100	▲ 3	62.8	41.6	180,440	▲ 1,490	▲ 0.8	177,560
岡 山	153,300	163,800	▲ 10,500	93.6	145,200	▲ 8,100	94	97	▲ 3	78.3	66.6	158,550	▲ 1,640	▲ 1.0	156,020
広 島	123,300	132,600	▲ 9,300	93.0	117,800	▲ 5,500	95	99	▲ 4	83.8	71.1	129,970	▲ 160	▲ 0.1	127,890
山 口	103,800	111,000	▲ 7,200	93.5	98,500	▲ 5,300	96	97	▲ 1	74.3	48.5	108,760	▲ 2,060	▲ 1.9	107,020
愛 媛	73,000	74,900	▲ 1,900	97.5	68,700	▲ 4,300	98	99	▲ 1	54.9	36.8	73,920	▲ 570	▲ 0.8	72,740
高 知	55,600	57,900	▲ 2,300	96.0	53,700	▲ 1,900	95	98	▲ 3	19.0	17.9	50,070	20	0.0	49,270
福 岡	176,400	182,500	▲ 6,100	96.7	162,000	▲ 14,400	96	96	0	44.7	31.3	182,470	▲ 1,910	▲ 1.0	179,550
熊 本	180,500	188,300	▲ 7,800	95.9	167,900	▲ 12,600	97	97	0	54.9	48.6	189,310	▲ 610	▲ 0.3	186,290
宮 崎	84,600	92,600	▲ 8,000	91.4	79,900	▲ 4,700	98	100	▲ 2	62.8	56.3	93,600	▲ 870	▲ 0.9	92,100
鹿 児 島	102,300	112,500	▲ 10,200	90.9	95,500	▲ 6,800	95	101	▲ 6	49.6	57.7	111,070	▲ 470	▲ 0.4	109,290

注：更新箇所について、前報より増加した箇所は二重下線で、減少した箇所は下線で表した。

	品質概況等	備考
道府県	自治体等公表資料（公表資料の抜粋）	全農県本部等の地域生産振興と販売力強化に向けた取組み等（ホームページ公表資料の取り纏め）
北海道	<ul style="list-style-type: none"> 北海道の水稻の作柄は、6月全般の好天による旺盛な分けつにより穂数が「多い」、もみ数が「やや多い」となったこと、登熟は出穂・開花期以降の気象経過により「平年並み」となったことから、10a 当たり収量は577kg（作況指数107）となった。（12月5日付） ななつぼしの玄米の外観は、わずかに筋張った感じでやや劣る。青未熟粒、白未熟粒（乳白粒、腹白粒）及び死米の混入は平年よりやや多い。胴割粒の混入は、10%以上とやや多いものが見られる。これらは天候不順により刈取時期がやや遅れたことによる。着色粒の混入は少ない。形質については、光沢、粒形及び粒ぞろいは平年よりもやや劣る。（精米工 10月8日付） ゆめぴりかの玄米の外観は、ななつぼしと同様に白未熟粒（乳白粒、腹白粒）と死米の混入がやや多いが、青未熟粒及びその他未熟粒の混入は平年並みである。胴割粒の混入は、平年よりもやや多い。着色粒の混入は少ない。形質について、光沢、粒形及び粒ぞろいは平年並みである。（精米工 10月14日付） 9月の紋枯病の発生は、岩見沢市、北斗市ともに平年より多かった。アカヒゲホソミドリカスカメの発生量は平年並であった（10月20日付） 	<ul style="list-style-type: none"> 「北海道水田農業ビジョン」に基づき水張面積の拡大に取り組むとともに、稲作所得の向上や北海道米の安定的な需要確保に向けた施策を推進する。 共販体制の強化や実需者との契約取引の拡充を図るとともに、消費者ニーズに対応した商品開発・販促企画により道産農畜産物のブランド力を高め、有利販売に努める。
青森	<ul style="list-style-type: none"> つがるロマン（黒石） 精玄米重は平年比113%と重く、玄米千粒重は平年比102%と平年並み。㎡当たり穂数は平年比121%と多く、籾数は平年比141%とかなり多かった。登熟歩合（1次枝梗+2次枝梗）は68.1%と平年より20.7ポイント低かった。粒厚別重量歩合のピークは2.1mmで平年より一段上層、1.9mm以上の重量歩合は96.0%と平年並みであった。稈長、穂長とも平年より長かった。 まっしぐら（十和田） 精玄米重は平年比105%とやや重く、玄米千粒重は平年比107%と重かった。㎡当たり穂数は平年比103%とやや多く、籾数は平年比107%と多かった。登熟歩合は74.9%と平年より8.0ポイント低かった。粒厚別重量歩合のピークは2.1mmで平年より一段上層、1.9mm以上の重量歩合は93.5%と平年を2.0ポイント下回った。稈長は平年並みで、穂長は平年よりやや長かった。（11月28日付） 田植期から出穂期まで天候に恵まれ全もみ数（穂数×1穂当たりもみ数）が多かったことから、8月に日照時間が平年を下回り登熟（開花、受精から成熟期までの子実の肥大、充実）が「やや不良」となったものの、10a 当たり収量は610kg（作況指数104）となった。（12月5日付） まっしぐらの玄米の外観は少し小粒だが、充実度、光沢、粒ぞろいは平年並みである。白未熟粒、青未熟粒、その他未熟粒の混入は、概ね平年並みだが、地域により差がある。胴割粒、被害粒、死米の混入も概ね平年並みだが地域により差がある。着色粒は一部に散見される。（精米工 12月3日付） つがるロマン玄米の外観は少し小粒だが光沢は良好である。地域により若干差はあるものの粒ぞろいは概ね良い。白未熟粒の混入は散見される程度で全体的に少ない。青未熟粒及びその他未熟粒の混入は平年並みで地域により差がある。胴割粒、被害粒、死米の混入は平年並みで地域により差がある。着色粒は一部に散見される程度である。（精米工 10月31日付） 	<ul style="list-style-type: none"> 米穀の収穫前契約による安定的取引の拡大（44,820㌧、前年比108%）
岩手	<ul style="list-style-type: none"> 田植期から出穂期まで天候に恵まれ全もみ数（穂数×1穂当たりもみ数）が多かったことから、8月に日照時間が平年を下回り登熟（開花、受精から成熟期までの子実の肥大、充実）が「やや不良」となったものの、10a 当たり収量は562kg（作況指数105）となった。（12月5日付） ひとめぼれは全体的に白未熟粒（乳白粒、腹白粒）及び死米の混入がやや目立つ。青未熟粒の混入は少ない。胴割粒の混入は少なく良好である。被害粒（奇形粒や砕粒）、着色粒（カメムシの被害による）の混入は少ない。地域（北上川上流、北上川下流）による品質の差は比較的小さい。形質（光沢、粒形、粒揃い）は、平年と同様に良好である。（精米工 11月17日付） 	<ul style="list-style-type: none"> 実需者の早期見える化に向けた、播種前契約の拡大（25年産主食うるち米82,262㌧、前年比105%）
宮城	<ul style="list-style-type: none"> （大崎）平坦、丘陵地域は、㎡当たり穂数は多く1穂数は平年並み、㎡当たり籾数は多くなった。山間地域は㎡当たり穂数は多くなったが1穂数は少なく、㎡当たり籾数は少なくなった。登熟歩合は低く、8月に日照時間が平年を下回り、籾数が多くなったためと考えられる。特に、2次枝梗が多いササニシキで顕著であった。千粒重は平年並みであり、平坦の収量はほぼ平年並みであったが、山間地域は平年よりやや低かった。（12月5日付） 田植期から出穂期まで天候に恵まれ全もみ数（穂数×1穂当たりもみ数）が多かったことから、8月に日照時間が平年を下回り登熟（開花、受精から成熟期までの子実の肥大、充実）が「やや不良」となったものの、10a 当たり収量は559kg（作況指数105）となった。（12月5日付） ひとめぼれは全体的に白未熟粒（乳白粒、腹白粒）及び死米の混入がやや目立つ。青未熟粒の混入は少ない。胴割粒の混入は平年並みであるが、10%以上とやや多いものが見られる。被害粒（奇形粒や砕粒）、着色粒（カメムシの被害による）の混入は少なく良好である。地域（県北・県央・県南）による品質の差は比較的小さい。形質（粒形、粒揃い）は、昨年と同様に良好である。（精米工 10月17日付） 	<ul style="list-style-type: none"> 水田フル活用に向けた、集荷率向上と契約栽培の取組強化（複数年・播種前・収穫前契約142千トン、前年比134%）
秋田	<ul style="list-style-type: none"> あきたこまちの玄米の外観は、地域により若干差はあるものの全体的に良好である。白未熟粒の混入は散見される程度で全体的に少ない。青未熟粒及びその他未熟粒の混入は平年並みか平年より若干多く、地域により差がある。胴割粒、被害粒、死米の混入は平年並みで少ないが、地域により差がある。着色粒は一部に散見される程度である。（精米工 12月3日付） 田植期から出穂期まで天候に恵まれ全もみ数（穂数×1穂当たりもみ数）がやや多かったことから、8月に日照時間が平年を下回り登熟（開花、受精から成熟期までの子実の肥大、充実）が「やや不良」となったものの、10a 当たり収量は596kg（作況指数104）となった。（12月5日付） （鹿角）JAかつの集荷分のあきたこまちの一等米比率は、11月26日現在で89.5%となっている。（11月27日付） 	<ul style="list-style-type: none"> 米穀の播種前・収穫前契約における3者契約・複数年契約の数量拡大（29,244㌧、前年比101%）
山形	<ul style="list-style-type: none"> 田植期から出穂期まで天候に恵まれ全もみ数（穂数×1穂当たりもみ数）が多かったことから、8月に日照時間が平年を下回り登熟（開花、受精から成熟期までの子実の肥大、充実）が「やや不良」となったものの、10a 当たり収量は623kg（作況指数105）となった。（12月5日付） えぬぎきは、白未熟粒（乳白粒）の混入がやや目立つものがあるものの、一昨年のような高温障害による腹白・背白の発現は少ない。未熟粒の混入の多くは青未熟粒及びその他未熟粒である。胴割粒、被害粒（奇形粒や砕粒）、着色粒（カメムシの被害による）、死米の混入は少なく良好である。地域（庄内、内陸）による品質の差も少ない。形質について、光沢、粒形、粒揃いは昨年と同様に良好である。（精米工 10月8日付） 	<ul style="list-style-type: none"> 「つや姫」の安定した高品質・良食味生産体制の確立とブランド化推進（26年産6,692㌧、前年比103%）

	品質概況等	備考
福島	<ul style="list-style-type: none"> ・田植期から出穂期まで天候に恵まれ全もみ数（穂数×1穂当たりもみ数）が多かったことから、出穂期以降9月上旬まで日照時間が平年を下回り登熟（開花、受精から成熟期までの子実の肥大・充実）が「やや不良」となったものの、10a当たり収量は560kg（作況指数104）となった。（12月5日現在） ・出穂期は平年に比べ早まったものの、8月下旬から9月中旬にかけて気温が平年より低かったことから、登熟日数は平年に比べ長くなっている。成熟期は、会津地域研究所と浜地域研究所で平年並み、本部で平年より1週間程度遅れた。（10月3日付） 	<ul style="list-style-type: none"> ・生産者にとって作りやすい品種特性（耐倒伏性、品種収量安定性）の啓蒙を通じた米の県オリジナル品種「天のつぶ」の作付拡大（約2,000ha、前年比252%）
茨城	<ul style="list-style-type: none"> ・平成26年産水稲の作柄は、田植期以降の天候に恵まれ、穂数及び1穂当たりもみ数がやや多くなったことから、全もみ数が多くなった。登熟は、一部出穂の遅いものに8月中下旬の日照不足による稔実の低下が見られたものの、総体としては平年並みとなった。これらの結果、10a当たり収量は548kg（作況指数105）となった。（12月5日付） ・10月28日現在（水戸市）のあきたこまち（5月1日移植）の稈長は平年並み、穂長は平年よりやや短い。穂数は平年よりやや多く、一穂穂数は平年並みで、m当たり穂数は平年より多かった。千粒重は平年より軽いものの、登熟歩合は平年より高かったことから、玄米重は平年並であった。7月下旬の大雨、8月の台風により、倒伏程度は平年より大きかった。倒伏により穂発芽が生じたものの、登熟歩合は平年より高かった。コシヒカリ（5月1日移植）の稈長及び穂長は平年並みであった。穂数は平年より多く、一穂穂数は平年よりやや多いことから、m当たり穂数は平年より多かった。千粒重は平年よりやや軽く、登熟歩合は平年よりやや低く、玄米重は平年比105%とやや多かった。台風等により成熟期15日前頃から倒伏し始め、倒伏程度は平年より大きくなったが、登熟歩合は平年並みであった。（11月7日付） ・コシヒカリの玄米の外観は、やや筋張った感じで充実はやや劣る。地域により若干バラツキはあるものの粒ぞろいは概ねよい。県南や県西地区の一部で高温障害による心白・腹白の発現が見られるものがある。白未熟粒の混入は、見られるが程度は平年より少ない。青未熟粒及びその他未熟粒の混入は平年並みか平年より僅かに多く見られる。胴割粒の混入は、見られるが軽微なものが多く、被害粒の混入は薄茶米やねじれ粒が主体で、比較的少ない。着色粒は一部に散見される程度である。（精米工 10月3日付） ・「あきたこまち」の玄米の外観は、光沢は平年並み程度であるが、充実度・粒ぞろいは平年よりやや劣る。白未熟粒の混入は、平年ほとんど見られないが、本年産はやや見られる。青未熟粒及びその他未熟粒の混入は平年並みか平年より僅かに多くみられる。胴割粒の混入は、軽微なものが僅かに見られる程度。被害粒の混入は比較的少ないが、地域により差がある。着色粒は全体的に散見される程度である。（9月25日付 精米工） 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ふくまる」（県オリジナル品種）の作付推進（354ha、前年比3,078%）、および「はるみ」（全農オリジナル品種）の作付推進（106ha、前年比183%）
栃木	<ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、穂数が「平年並み」となり、1穂当たりもみ数も幼穂形成期に一時的に気温が低く日照時間がやや少ない時期があったものの、おおむね天候に恵まれ「平年並み」となったことから、「平年並み」となった。登熟は、8月中旬以降、気温及び日照時間が平年を下回って経過し、特に9月中旬から下旬にかけて、最低気温が平年を大きく下回るなどの影響がややみられたものの、倒伏面積が少なく9月中旬以降日照時間が多かったことから、「平年並み」となった。この結果、栃木県の10a当たり収量は538kg（作況指数100）となった。（12月5日付） 	<ul style="list-style-type: none"> ・品質管理にこだわり、新鮮なお米、安全なお米、おいしいお米をお届けします。
埼玉	<ul style="list-style-type: none"> ・東部の全もみ数は「やや多い」となった。登熟は「やや不良」となった。このことから、10a当たり収量は514kg（作況指数102）となった。西部の全もみ数は「やや多い」となった。登熟は「平年並み」となった。このことから、10a当たり収量は477kg（作況指数102）となった。（12月5日付） ・早期、早植栽培は、莖数は平年を上回って推移し、穂数も平年並〜多く確保された。出穂期は平年並〜3日程度早まり、登熟は平年並となった。8月早期栽培の収穫は極く早いもので、平年より3〜5日程度早く、以降のものは、平年並〜やや遅れた。収量は穂数が平年並〜やや多く確保されたことから、平年並からやや多収であった。品質は早期栽培では高温障害と思われる白未熟粒が多く、また、早植栽培ではm当たりもみ数が多く、8月中下旬が日照不足傾向であったことから、青未熟米や死米がやや多く、劣った。普通栽培は、莖数は平年を上回って推移し、穂数は平年並〜やや多く確保された。出穂期は平年並、登熟は良好であった。成熟期は平年並〜3日程度早まった。収量は穂数が平年並〜やや多く、登熟も良好であったことからやや多収であった。品質はm当たりもみ数がやや多かったが、登熟が良好であったことから、白未熟粒等は少なく良好であった。10月末日現在の検査結果は1等73.9%、2等24.1%、3等1.9%、規格外0.1%であった。（12月1日付） ・イネ綱葉枯病は、発生した株の割合は平年より高く多発した昨年並となったが、ヒメトビウカカ初期の発生が抑えられたため重篤な発病は少なく、収量への影響は昨年と比べ小さくなった。（10月10日付） 	<ul style="list-style-type: none"> ・JA・TACとの連携による、大規模生産者対応を中心とした米の集荷拡大（206戸（前年比176%）、集荷数量5,655t（前年比183%））
千葉	<ul style="list-style-type: none"> ・平成26年産水稲の作柄は、全もみ数がやや多くなり、登熟が平年並みに推移したことから、10a当たり収量は558kg（作況指数104）となった。（10月30日付） ・「コシヒカリ」は、胴割粒及び着色粒は地域により混入率に差がある。また、光沢も地域により差があるので注意が必要である。白未熟粒及び青未熟粒の混入は比較的少ない。 ・「ふさおとめ」は、充実度、登熟歩合及び光沢は概ね良い。肌ずれは見られなかった。粒ぞろい及び粒形は良好である。白未熟粒の混入は全体的に少ない。青未熟粒は適度に混入している。胴割粒、被害粒の混入は比較的少ない。着色粒は全体的に散見される。（9月9日付 精米工） 	<ul style="list-style-type: none"> ・担い手への品目提案、技術指導、販売提案などによる生産振興対策の支援強化（実需者提携米53ha（前年比379%））
新潟	<ul style="list-style-type: none"> ・田植最盛期は、平年に比べて2日早い5月10日となった。一部地域で5月中旬の低温・強風の影響による活着不良、植え込みがみられたものの、5月下旬以降、好天で推移したため分けつが旺盛となったことから、莖数は多くなった。出穂最盛期は、5月下旬以降、天候に恵まれ生育が進んだことから、平年に比べて2日早い8月6日となった。穂数は、地域差がみられるものの、莖数が多かったことから、多くなった。また、1穂当たりもみ数は、穂数が多いことの相反作用から、やや少なくなり、このことから、全もみ数はやや多くなった。登熟は、全もみ数がやや多かったこと、台風第11号によるフェーン風、8月の日照不足により、稔実低下等の被害が見られたことからやや不良となった。刈取最盛期は、8月の日照不足により、登熟が遅れたため平年並みの8月21日となった。このことから、新潟県の水稲の作柄は10a当たり収量547kgとなった。（12月5日付） ・コシヒカリの玄米の外観については、肌ずれは少なく、光沢があるものが多い。白未熟粒については、心白粒、基部未熟粒、腹白粒が見られたが、平均値で2%前後と多くはない。胴割粒の混入は、平均で5.4%であるが、最大で16.7%とバラツキが見られる。青未熟粒は粒が小さく、充実が不十分なものが多かった。カメムシなどによる着色粒および砕粒は比較的少ない。（精米工 10月15日付） 	<ul style="list-style-type: none"> ・米の担い手との契約栽培による農家経営安定と集荷拡大（13,185t、前年比420%）および需要の安定確保に向けた大口需要者との複数年契約の実施（4,170t、新規）

	品質概況等	備考
富山	<ul style="list-style-type: none"> ・ 田植最盛期は5月11日で、平年に比べ2日、前年に比べ1日早くなった。出穂最盛期は8月2日で、平年に比べ2日早く、前年に比べ2日遅くなった。全もみ数（穂数×1穂当たりのもみ数）は、穂数が「やや多い」、1穂当たりもみ数が「平年並み」となったことから「やや多い」となった。登熟は、8月の日照不足等から「やや不良」となった。刈取最盛期は9月15日で、平年に比べ2日早く、前年に比べ1日遅くなった。これらのことから、富山県における平成26年産水稻の10a当たり収量は541kgとなった。（12月5日付） ・ コシヒカリの玄米の外観については、肌ずれは少なく、光沢があるものが多い。粒張りもしっかりしており、粒ぞろいも良い。白未熟粒については、地域によるばらつきが見られたが、大きく目立つほどではない。胴割れ粒の混入は、軽微なものが僅かに見られる程度である。カメムシなどによる着色粒は比較的少ない。（精米工 10月3日付） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 富山米ブランドの確立に向けた、販売促進キャンペーンの実施による産地精米の拡大（10,634％、前年比109％）
石川	<ul style="list-style-type: none"> ・ 作柄は、田植期以降おおむね天候に恵まれ、全もみ数（穂数×1穂当たりのもみ数）は平年並みとなったものの、8月の記録的な降水量や日照不足の影響により、登熟（開花、受精から成熟期までの子実の肥大、充実）が平年に比べやや不良となったことから、10a当たり収量は508kgとなった。（12月5日付） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 石川県産米の需要確保に向けた播種前・収穫前契約の実施（30,570％、前年比93％）および輸出用米（新規需要米）の販売拡大（91％、前年比456％）
福井	<ul style="list-style-type: none"> ・ 田植最盛期は5月16日で平年に比べ1日遅く、前年並みとなった。初期生育は田植後の低温の影響で生育が遅れ気味となったが、5月下旬以降は、高温多湿で経過したため、概ね順調な生育となった。出穂最盛期は8月1日で、平年に比べて2日早く、前年に比べ1日早くなった。穂数は「やや多い」となった。1穂当たりもみ数は、「平年並み」となった。全もみ数（穂数×1穂当たりもみ数）は、穂数が「やや多い」、1穂当たりもみ数が「平年並み」であったことから「やや多い」となった。登熟は、出穂期以降（8月第1半旬～9月第1半旬）、低温、日照不足で経過したことから「やや不良」となった。刈取最盛期は9月12日で、平年に比べ1日遅く、前年に比べ2日遅くなった。これらのことから、福井県における平成26年産水稻の10a当たり収量は510kg（作況指数98）となった。（12月5日付） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ コシヒカリのふるさとを誇りに、安全でおいしいお米を福井から全国へ。
長野	<ul style="list-style-type: none"> ・ 長野県における平成26年産水稻の作柄は、作況指数「96」、10a当たり収量は597kgとなった。これは、7月までの好気象により、全もみ数が平年並みに確保できたものの、8月が曇雨天続きで日照不足となったことや、風雨による穀すれ・褐変粒の発生が一部地域にみられ、粒の稔実がやや不良となった。また、9月には日照時間が回復したものの、9月中下旬に最低気温の低下があり、登熟を阻害された。このため、粒の肥大がやや不良となったことから、登熟はやや不良となった。なお、作柄表示地帯別では、全地帯ともに登熟がやや不良となったが、全もみ数がやや多く確保できた北信の作柄は平年並みで、他の地帯（東信・南信・中信）は、全もみ数が平年並みであったことから作柄はやや不良となった。（12月5日付） ・ 玄米の外観は、白未熟粒の混入は少ないが、青未熟粒及びその他未熟粒、死米の混入はやや多い。胴割れ粒の混入は10%以上と多いものがあり、地域（主に北信及び中信地域）によりバラつきがある。被害粒、着色粒（カメムシの被害による）の混入は少なく良好である。形質について、全体的に光沢は概ね良好であり、粒形・粒揃いは、昨年と同様に良好である。（精米工 10月31日付） ・ 9月は、紋枯病が全般に平年に比べ発生は多く、地域によっては上位葉鞘への進展が著しいほ場がみられた。稲こうじ病は全般に平年並らやや多く、地域によって発生の目立つところがあった。（10月15日付） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生産者の人々が土づくりからこだわり、丹精込めて作られた長野米は、最新設備の工場徹底した品質管理のもと、全国各地にお届けしています。
滋賀	<ul style="list-style-type: none"> ・ 田植最盛期は平年より1日早い5月9日となった。茎数は5月中旬から6月の高温等により、「やや多い」となった。出穂最盛期は平年より1日早い8月2日となった。穂数は茎数がやや多くなったこと等から「やや多い」となった。1穂当たりもみ数は幼穂形成期がおおむね天候に恵まれたことから「平年並み」となった。全もみ数は、穂数が「やや多い」で1穂当たりもみ数は「平年並み」となったことから「やや多い」となった。登熟は出穂期以降台風、大雨、日照不足に加え、8月中旬～9月中旬にかけて低温で経過したこと等から「不良」となった。刈取最盛期は平年並みの9月17日となった。以上のことから、滋賀県における水稻の作柄は10a当たり収量502kg（作況指数97）となった。（12月5日付） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 近江米のブランド方向上に向けた主力品種としての新品種「みずかがみ」の育成・拡大（815％、新規）、および輸出販路の開拓（2％、新規）
兵庫	<ul style="list-style-type: none"> ・ 穂数は田植後の気象がおおむね順調に経過したことから平年並みとなった。穂当たりもみ数は幼穂形成期の気温が平年を下回って経過したことから、やや少なくなった。全もみ数は穂数が平年並みで、1穂当たりもみ数がやや少なくなったことから、やや少なくなった。登熟は早生品種で出穂後の日照不足の影響で不良傾向となったが、中生・晩生品種では9月下旬の気温・日照時間が平年を上回って経過したことから良好となった。このことから全体では平年並みとなった。兵庫県の10a当たり収量は、487kg（作況指数97）となった。（12月5日付） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「集荷決起大会」および「ほんまもん山田錦需要拡大イベント（東京）」の開催等によるグレードアップ兵庫産山田錦の取組強化（11,650％、前年比104％）
岡山	<ul style="list-style-type: none"> ・ 穂数は、中北部では初期生育が良好で分けつが促進され茎数が多かったことからやや多くなった。南部は茎数が平年並みを確保していたものの、幼穂形成期にあたる8月が日照不足であったことからやや少なくなった。県全体では平年並みとなった。1穂当たりもみ数は、中北部では幼穂形成期にあたる7月の天候がおおむね良好であったこと、南部は穂数減少の補償作用等から、いずれも平年並みとなり、全もみ数は中北部ではやや多く、南部はやや少なくなり、県全体で平年並みとなった。登熟は8月の記録的な日照不足により病等の発生により中北部では不良となり、南部においても出穂開花期の日照不足の影響や病虫害及び台風による倒伏の発生等からやや不良となった。県全体では不良となった。このことから、10a当たり収量は中北部が470kg（作況指数92）、南部が508kg（同95）、県全体の10a当たり収量は493kg（同94）となった。（12月5日付） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実需者ニーズに即した酒造好適米の生産拡大（1,684％、前年比111％）
広島	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1㎡当たり全もみ数は、1㎡当たり穂数が平年に比べてやや多かったものの、1穂当たりもみ数がやや少なかったことから、「平年並み」になった。登熟は8月に曇雨天が続いたことから、同月の日照時間が平年を大幅に下回り、登熟が抑制されたため、「やや不良」となった。（12月5日付） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 米の多収性品種「あきさかり」を新たに追加した、JAグループを挙げた米頒布会の実施（頒布19,524件、前年比104％）
山口	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1㎡当たり穂数は、5月に平年を上回る日照時間が続いたことから、早生種では平年に比べ多くなったものの、6月から7月中旬までの日照不足により、中生・晩生種では平年に比べ少なくなったことから、全体では「平年並み」となった。1穂当たりもみ数は、早生種では、1㎡当たり穂数が多かったことや、6月から7月中旬までの日照不足の間に幼穂形成期（穂の中で穂が出来はじめる時期）を迎えたため、もみ数の増加に影響を受け、平年に比べ少なくなった。中生・晩生種では、1㎡当たり穂数が平年に比べ少なかったものの、補償作用により平年並みとなった。これにより全体では「やや少ない」となり、また、1㎡当たり全もみ数も、「やや少ない」となった。登熟は、早生種では、8月の記録的な日照不足による影響が大きかったものの、9月上旬以降天候が回復したことにより早生種の中でも登熟時期の遅い『きぬむすめ』や中生・晩生種が回復したため、「平年並み」となった。この結果、10a当たり収量は483kg（作況指数96）となった。（12月5日付） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 収穫前契約、用途別結び付き玄米販売の拡大（収穫前契約22,800％、前年比103％）

	品質概況等	備考
愛 媛	<ul style="list-style-type: none"> 平成26年産水稻の作柄は、1㎡当たり全もみ数は平年並みが確保されたものの、8月の日照不足の影響により、登熟はやや不良となった。このことから10a当たり収量は490kg、作況指数98となった。(12月5日付) 	<ul style="list-style-type: none"> 米の新奨励品種「にこまる」の生産集荷拡大(集荷1,030%、前年比335%)、および品質向上に向けた実証試験(施肥体系、栽植密度)の実施(県下10地区)
高 知	<p>(1) 早期栽培 苗の生育は概ね良好だった。初期生育は4月前半の低温と強風のためやや抑制されたが、その後天候に恵まれたことから生育は回復し、穂数は平年並みとなった。1穂当たりもみ数は幼穂形成期となる6月の低温と日照不足の影響等により、やや少なくなった。全もみ数は穂数が平年並みとなったものの、1穂当たりもみ数がやや少なくなったことから、やや少なくなった。登熟は8月に入って日照不足となったものの、生育期の天候に恵まれ稲体が健全であったことや、7月中下旬の多照と気温日較差が大きかったことなどから、やや良となった。被害は8月上旬の台風第12号、第11号による冠水や倒伏等が発生した。その後降雨の日が続いたことから刈取りが遅れ、倒伏したほ場では穂発芽等が発生した。また一部で黄化萎縮病の発生がみられたことなどから、総じてやや多くなった。これらの結果、10a当たり収量は470kg、作況指数「98」となった。(12月5日付)</p> <p>(2) 普通栽培 苗の生育、初期生育とも天候に恵まれ概ね良好だった。穂数は分けつ期となる7月の多照と気温日較差が大きかったことから、やや多くなった。1穂当たりもみ数は幼穂形成期となる8月の日照不足や台風の影響等により少なくなった。全もみ数は穂数がやや多くなったものの、1穂当たりもみ数が少なくなったことから少なくなった。登熟は長期にわたる日照不足や台風の影響に加え、いもち病などの病害が多く発生したことからやや不良となった。被害は日照不足や台風の影響等によりもみ数の減少や不稔もみが発生した。病虫害では、長雨により適期防除ができなかったことからいもち病の発生が多くなったほか、こま葉枯病や稲こうじ病、紋枯病等が広範囲にみられ、一部ではウンカの被害もみられたことなどから、総じて多くなった。これらの結果、10a当たり収量は393kg、作況指数「91」となった。(12月5日付)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 1等米比率の維持・向上に向けた、高温と日照不足に対応した高品質米生産の基本技術の徹底(共計1等米比率24%、前年26%)
福 岡	<ul style="list-style-type: none"> 平成26年産水稻の作柄は、梅雨時期の日照不足により初期分けつが抑制され、8月以降も寡照であったことから、穂数はやや少なくなった。全もみ数は幼穂形成期から減数分裂期の天候がおおむね順調であったものの、穂数がやや少なかったことからやや少なくなった。登熟は一部いもち病及びウンカによる登熟低下がみられたものの平年並みとなった。この結果、10a当たり収量は478kg(作況指数96)となった。(12月5日付) 	<ul style="list-style-type: none"> 地産地消・食育の取組強化に向けた学校給食米の一元供給および金のめし丸県産米「元氣つくし」の作付拡大(4,260ha、前年比112%)
熊 本	<p>(1) 県北地帯 全もみ数は穂数がやや少なく、1穂当たりもみ数が平年並みとなったことから「やや少ない」となった。登熟は生育の遅れが見受けられたものの、9月下旬以降天候が回復しつつあったことと、全もみ数がやや少なかったことにより、一部でウンカによる登熟不良がみられたが「平年並み」となった。</p> <p>(2) 阿蘇地帯 全もみ数は穂数がやや多くなったものの、1穂当たりもみ数がやや少なかったことから、「平年並み」となった。登熟は生育の遅れから刈取り時期が遅くなったことにより登熟期間が長くなったため、粒の肥大・充実が平年並みに回復したものの、台風による穂ずれ及び出穂期以降日照不足に推移したことから、「やや不良」となった。</p> <p>(3) 県南地帯 全もみ数は穂数が平年並みとなったものの、1穂当たりもみ数がやや少なかったことから「やや少ない」となった。登熟は、生育の遅れが見受けられたものの、9月下旬以降天候が回復したことと、全もみ数がやや少なかったことから補償作用により「やや良」となった。</p> <p>(4) 天草地帯 全もみ数は、穂数が平年並みとなったものの、1穂当たりもみ数がやや少なくなったことから、「やや少ない」となった。登熟は、早期において出穂期以降日照不足に推移したものの、7月中下旬からの日照が平年並みとなったことと、普通期の全もみ数もやや少ないことから「平年並み」となった。</p> <p>この結果、熊本の10a当たり収量は500kg(作況指数97)となった。(12月5日付)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 需要に応じた売れる米づくりの推進。
宮 崎	<p>(1) 早期栽培 穂数は4月下旬から5月上旬の気温が平年を下回って推移したが、5月が多照で推移したことから、1㎡当たり全穂数は平年並みとなった。全もみ数は穂数、1穂当たりもみ数ともに平年並みとなったことから、平年並みとなった。登熟は出穂期となる6月下旬から7月上旬が低温・寡照で推移したが、7月中旬から下旬にかけては高温・多照で推移したことから、平年並みとなった。被害は出穂期に台風の影響を受けた地帯での不稔粒の発生や、いもち病、紋枯れ病、カメムシ等の病虫害の発生もみられたが、総じて平年並みとなった。この結果、10a当たり収量は488kg(作況指数102)となった。(12月5日付)</p> <p>(2) 普通栽培 穂数は6月から7月上旬が低温や日照不足の影響から分けつが抑制され、平年に比べて少なくなった。全もみ数は1穂当たりもみ数はやや多くなったが、穂数が少なくなったことから、平年に比べてやや少なくなった。登熟は日照不足やウンカ、台風による倒伏等の影響があったが、もみ数がやや少なかったことから補償作用により平年並みとなった。被害は生育期間を通しての日照不足と台風やウンカ等による登熟への影響から、総じて平年に比べて多くなった。この結果、10a当たり収量は485kg(作況指数95)となった。(12月5日付)</p> <p>・コシヒカリの玄米の外観は、地域差はあるものの、全体的に光沢、粒ぞろい、粒形は良好である。白未熟粒の混入は全体的に少ない。青未熟粒及びその他未熟粒の混入はやや多く、地域による差がある。 胴割粒及び被害粒の混入は比較的小さいが地域により差がある。死米の混入はやや多く、これも地域による差がある。着色粒は全体的に散見される程度である。 (8月15日付 精米工)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 国における農地の集積・集約化や米をはじめとする農業政策、県でのフードビジネス推進への取り組みなど、各種政策に対応するとともに事業環境の大きな変動に柔軟な対応をしていく。

	品質概況等	備考
鹿児島	<p>(1) 早期栽培 全もみ数は穂数が平年に比べて少なかったものの、1穂あたりもみ数が多かったことから平年並みとなった。登熟は登熟後期の7月中下旬が高温・多照で推移したこと、台風や雨の影響で刈り取りが遅くなって登熟が進んだことから平年に比べてやや良となった。被害は生育初期と出穂期の日照不足や台風による倒伏等はあったが被害程度は軽く、病虫害も少なかったことから平年に比べてやや少なくなった。この結果、10a当たり収量は455kg(作況指数103)となった。</p> <p>(2) 普通栽培 全もみ数は日照不足等の影響で有効穂数がやや少なく、1穂あたりもみ数もやや少なかったことから平年に比べ少なくなった。登熟は、もみ数が少ないことによる補償作用で玄米千粒重は平年をやや上回ったものの、8月から登熟期にかけて日照不足が続いたことに加え、度重なる台風による倒伏や出穂後から収穫期にかけてウンカやいもち病等の被害発生もあり、不稔もみの増加や粒の肥大不足となった。被害は田植え後の初期生育期や幼穂形成期から登熟期の8~9月の日照不足で穂数やもみ数が減少し、ウンカやカメムシ等の虫害に加えていもち病や紋枯病等の病害、台風による倒伏等の発生もあったことから、平年に比べ多くなった。この結果、10a当たり収量は463kg(作況指数94)となった。(10月30日付)</p> <p>・コシヒカリの玄米の外観は、光沢は地域によりかなり差はあるが、粒ぞろい及び粒形は良好である。白未熟粒の混入は全体的に少ない。青未熟粒及びその他未熟粒の混入は地域により差がある。胴割粒及び被害粒の混入は比較的少ないが地域により差がある。死米の混入はやや多く、これも地域により差がある。着色粒は全体的に散見される程度である。(8月22日付 精米工)</p>	<p>・大規模稲作農家との品質基準に基づく4社契約取引の拡大ならびに行政と一体となった非主食用米の産地化推進。</p>

注1：自治体等公表資料については地方自治体及び出先機関等が公表している資料から抜粋、日付は公表日。

注2：備考欄のイタリック体はホクレン農業協同組合及び全農県本部等のホームページで公表されている資料を基に取り纏め。ゴシック体は全国農業協同組合連合会のホームページで公表されている資料から抜粋。

注3：(精米工)とあるものは、一般社団法人日本精米工業会が提供している「米質概況情報」から抜粋。但し「米質概況情報」は一般社団法人日本精米工業会が正会員精米工場から得たサンプル(玄米)を測定したものであり、母集団として産地の評価を決めるものではない。

注4：更新箇所については下線で表した。

参考資料

平成26年産水陸稲の収穫量(農林水産省、北海道農政事務所、東北農政局、関東農政局、北陸農政局、近畿農政局、中国四国農政局、九州農政局)、
平成25年産水陸稲の収穫量(農林水産省)、
平成26年産米の農産物検査結果(速報値/平成26年11月30日現在)(農林水産省)、
平成25年産米の農産物検査結果(速報値/平成26年11月30日現在)(農林水産省)、
平成26年産米の都道府県別の生産数量目標について(農林水産省)、
平成27年産米の都道府県別の生産数量目標について(農林水産省)、
平成26年度病害虫発生予報第7号(農林水産省)
玄米品質概況(平成26年産)(一般社団法人日本精米工業会)

平成26年度病害虫発生予察情報第19号9月月報(北海道病害虫防除所)、
平成26年産稲作技術情報(総括)(宮城県大崎農業改良普及センター)
生育状況(秋田県ホームページ「こまちチャンネル」<http://www.e-komachi.jp/>)、
主要な農作物の生育情報平成26年度第7号(福島県)、
農研速報(茨城県農業総合センター農業研究所)
平成26年産水稻の作柄概況(埼玉県)、病害虫防除情報(埼玉県病害虫防除所)、
病害虫発生予察9月月報(長野県病害虫防除所)、

ホクレン農業協同組合連合会ホームページ、JA全農とちぎホームページ、JA福井県経済連ホームページ、
JA全農長野ホームページ、JA熊本経済連ホームページ、JA宮崎経済連ホームページ、JA鹿児島県経済連ホームページ、
都府県本部による国産農畜産物の販売力強化に向けた取り組み(全国農業協同組合連合会ホームページ)